



日本プライマリ・ケア連合学会
四国ブロック支部



発行人：阿波谷敏英、川上和徳
事務局 〒761-2103
香川県綾歌郡綾川町陶 1720-1
綾川町国民健康保険陶病院気付
副支部長/事務局長 川上和徳
Tel. 087-876-1185 Fax. 087-876-3795
E-mail jpicaardk@yahoo.co.jp

★ 第25回日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部地方会、第32回四国地域医学研究会合同学術集会開催報告

大会長： 的場 俊（高知県立あき総合病院）

さる2025年11月15日、16日、高知県立あき総合病院やまのホールにて、合同学術集会が開催されました。この集会は、毎年1回、四国各県が持ち回りで開催され、四国地域の医療従事者が集まり、地域医療の課題について学び、意見交換する場として実施されています。今回も現地参加とオンライン参加を合わせて、1日目は130名、2日目は101名の方にご参加いただき、盛況のうちに終了しました。



1日目のシンポジウムでは「ACPと看取り」をテーマに、特に「教育」に焦点を当てました。メインシンポジストとして、内田 望 先生(埼玉医科大学 国際医療センター 緩和医療科 教授)と森下 幸子 先生(高知県立大学 准教授)を招聘し、お二人から、医学生・看護学生への教育の現状や課題についてご報告いただき、人生の最終段階のケアに関わる人材育成の重要性について多くの学びがありました。また、地域の現場から、釣井民子氏(東部ケアプランセンター 花ノケアマネジャー)が「高知県東部地域における在宅でのACP実践」について、中本雅彦施設長(介護老人保健施設 リゾートヒルやわらぎ)が「施設での看取りの取り組み」を、そして江田雅志 医師(高知県立あき総合病院)に「急性期病院における看取りの実践」についてご発表いただきました。「大学での教育の立場から」お二人の講師の発表が笑いあり、教育現場の苦悩あり参加者を魅了する講演でしたが、現場のお三方の発表も、メインのお二人に勝るとも劣らない熱量のご講演で、聴衆を魅了しました。おかげさまで講演時間が大幅に延長してしまい、参加者との活発な議論が行われたのですが、ディスカッションの時間がわずかになってしまったこととお詫び申し上げます。

また特別講演として、日本プライマリ・ケア連合学会 理事長 草場 鉄周 先生に「日本に求められるプライマリ・ケア」と題してご講演いただきました。草場先生からは、日本の医療が直面する課題や、その中で求められるプライマリ・ケアの役割、今後の展望について、大変示唆に富むお話をいただきました。特に、昨年、厚労省がかかりつけ医機能の法律化で、総合診療専門医の配置数を報告義務が明文化されたこととお話しされ、今後、総合診療専門医



のインセンティブが生まれる土壤ができたこと、今後、総合診療がますます必要とされる社会になっていくことを示していただきました。

2日目はポートフォリオ発表、症例報告、研究発表など盛りだくさんの発表でどの発表にも多くの質問や激励の言葉が添えられました。皆様の日頃の経験や研究、現場での葛藤を学会という形で表現、昇華してくださることで、大変内容の濃い学会になりました。やはり学会は一人一人のご発表の質と熱量が全てだと再認識できました。最後に、このような機会を与えていただきました2つの学会の皆様に、また開催にあたりご協力いただいたすべての関係者の皆様に心より感謝、御礼申し上げます。ありがとうございました。



★ ポートフォリオ発表会

2025年11月16日午前8時30分より、ポートフォリオ発表会が行われました。専攻医の齋藤大地先生（HITO病院）は領域5：「患者中心の医療」、渡部京介先生（徳島健生病院）は領域14b：「倫理的に困難な意思決定を伴う事例のケア」について、それぞれ発表していただきました。司会は原穂高先生（愛媛生協病院）、コメンテーターとして、田尻巧先生（あき総合病院）、稲葉香織先生（徳島大学総合診療医学分野）に参加していただき、ポートフォリオをより深めていけるような質問やコメントをいただきました。発表では、専攻医が患者さんに関わる中

専門研修支援委員：高松平和病院 植本 真由



での悩みや葛藤を、指導医との振り返りや枠組みを用いながら乗り越え、診療されている様子が感じられました。ルーブリックに沿って押さえるべきポイントを確認し、多職種連携の視点を確認したり、診療中の感情の振り返りを通して、より深く学習が行えたのではないかと思います。ご参加いただいた皆様、大変ありがとうございました。



★ 8th Sanuki GM Conference “『家族志向のケア』を深めよう”

所属：高松平和病院 植本 真由

2025年10月25日、香川県立中央病院にて、第8回 Sanuki GM Conference を開催しました。「『家族志向のケア』を深めよう」をテーマに、岡山県精神科医療センターの田中道徳先生をお招きし、ご講演やグループワークでの学習を行いました。

初めに、家族志向のケアの考え方や基本についてご講演をいただきました。そもそも家族志向のケアとは何か、「システム」や円環的因果律とは、個人のうしろにある“家族システム”を意識し、自分（医療者）も「システム」の一部であることを知り診療に取り組むことなどお話しいただきました。



次に、臨床場面を家族アセスメントに繋げる思考の流れを実践する、として、ライフサイクルと境界/サブシステムについて、それぞれ概説後に、症例を用いて個人ワークと4～5名でのグループワークを行いました。グループ毎に様々な視点で意見が出され、一人では思いつかないような家族関係の可能性に気づくことができました。その後の情報収集やアプローチの仕方についても大変勉強になりました。

最後は、総合演習として、実際にプライマリ・ケアの現場で出会うような症例について、どう家族アセスメントし介入していくか、再度グループでディスカッションを行いました。

家族関係の聴取だけでなく、そこからのアセスメントと介入方法について、今後の診療で是非取り組んでみたい、と思う内容でした。



★ 徳島から始める「ケアと医療と暮らしの輪」に参加して

所属： 海南病院 國永 直樹

このたび、「ケアと医療と暮らしの輪」(<https://careno-wa.net/>)に参加いたしました。会場には、医療・介護・福祉・行政関係者、そして地域の皆さまが集まり、互いの立場を越えて語り合う温かな雰囲気の中に包まれていました。そこには、「地域の暮らしを共に支える」という共通の思いがあり、まさに“ケアの輪”が広がっていることを実感いたしました。

会の前半では、病院での身体拘束ゼロを目指す取り組みや、「寝たきりにしないリハビリテーション」を通じて、病院が地域の福祉にどのように関わっていくかを学びました。病院の役割を単なる治療の場にとどめず、患者さんの「その人らしい暮らし」へとつなげていく姿勢に、深い感銘を受けました。こうした実践は、地域における医療の在り方そのものを問い直す大切な契機であると感じました。

また、医療的ケア児が社会の中で自らの居場所を持つことの意味や意義について学びました。医療が単に身体を支えるだけでなく、社会参加や生きる力を支援するものであることを改めて実感しました。さらに、ユース世代の孤立を防ぐ取り組みについての報告では、「地域に住んでいても、私たちが目を向けなければ、まるでそこに存在していないように思えてしまう」という言葉が印象的でした。地域に暮らす誰一人として取り残さない。その視点こそが、これからの地域包括ケアの基盤になるのだと感じました。

続いて、鞆の浦・神山町・海陽町の事例を通じて、病院や診療所が地域にどのように溶け込み、住民と共に医療を育んでいるかを学びました。地域の特性に応じて形を変えながらも、そこに共通しているのは「人のつながり」を大切にする姿勢でした。医療は地域に生きる人々との信頼関係の上に成り立つという原点を再確認いたしました。



また、オランダ発の「ポジティブヘルス」についてのお話では、“健康とは評価ではなく対話のプロセスである”という考え方が紹介されました。数値では測れない「生きる力」や「意味」を共に見つめることが、ケアの実践につながるという視点は非常に示唆に富んでいました。

さらに、地域で活動する医学部生たちの発表も心強いものでした。彼らが地域に入り、人々と関わる中で医師としての志を育んでいる姿には、四国のプライマリ・ケアの未来への希望を感じました。

最後に取り上げられた「Beyond ACP (アドバンス・ケア・プランニング)」では、“決定すること”よりも“対話を重ねるプロセス”の重要性が強調されました。人生の最終段階におけるケアは、選択そのものよりも、互いに理解し合う過程が大切であるという考えに深く共感しました。

今回の会を通じて、医療・福祉・地域がともに手を取り合い、「誰も取り残さない社会」を目指す実践が確かに広がっていると感じました。次回は、より多くの方にこの“輪”に加わっていただき、共に学び、語り合い、つながりを深めていただければ幸いです。

★ 横井徹先生が四国ブロック支部プライマリ・ケア功労賞を受賞されました

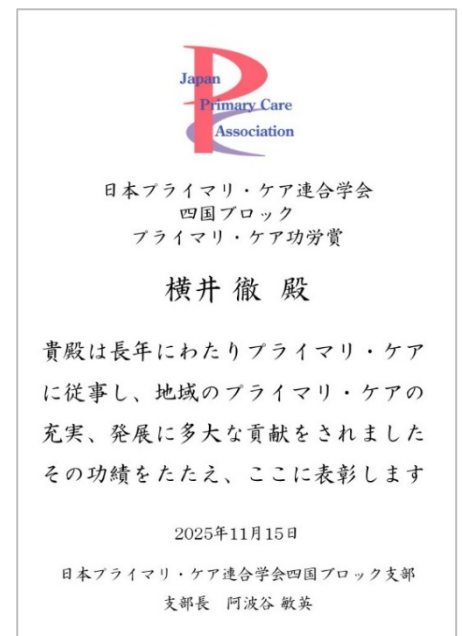
四国ブロック支部長：阿波谷敏英

日本プライマリ・ケア連合学会は、長年にわたりプライマリ・ケアに従事し、多大な功績のあるものを顕彰するためにブロック支部プライマリ・ケア功労賞を設けています。本学会およびブロック支部の基本理念がそれぞれの地域での真摯なプライマリ・ケア活動にあることを広く知らしめることを目的としています。四国ブロック支部では、2017年から毎年、支部役員から推薦された会員を、支部長、副支部長の投票で選考しています。既定の得票に満たない場合は該当者なしとなることもあります。この度、横井徹先生（香川県高松市 横井内科医院）が受賞され、第25回地方会において授与式をおこないました。

横井先生は、香川TFCを立ち上げ、研修会やメーリングリストを事務局として主導されました。適々斎塾をはじめ、プライマリ・ケア医の生涯教育の礎を築いてこられました。香川大学医学部の学生実習を受け入れるなど、学生教育も熱心に取り組んでおられます。四国ブロック支部の監事としても長年支部運営に貢献いただいております。これらの業績が高く評価されました。横井先生の受賞を心よりお慶び申し上げます。

四国ブロック支部プライマリ・ケア功労賞受賞者

2017年（第1回）	板東 浩 先生
2018年（第2回）	大原 昌樹 先生
2019年（第3回）	該当者なし
2020年（第4回）	川本 龍一 先生
2021年（第5回）	該当者なし
2022年（第6回）	該当者なし
2023年（第7回）	谷 憲治 先生
2024年（第8回）	該当者なし
2025年（第9回）	横井 徹 先生



★ 四国ブロック支部プライマリ・ケア功労賞を受賞して

横井内科医院 横井 徹

ブロック支部功労賞授与いただきありがとうございます。表彰会場、高知県立あき総合病院は、62年前亡父が内科医として1年間勤務した病院でもあります。当時私は生後3か月、不思議な縁を感じると共に驚いております。過去の受賞者は長年プライマリ・ケア実践、指導教育に取り組まれてきたレジェンドの皆様ばかり。「実践」があっても「指導教育」実績がない私がなぜ？、と。ただ「医師キャリアの中できることを地道に続けた結果」が評価に値するなら、その規模は別として方向性なら同じか、と勝手に「振り返り」ました。とすれば今回の受賞は私にとって望外の喜びです。

学生最後の夏休みも北アルプス縦走していた私は、卒後キャリアを真剣に考えることなく、ある安易な理由で岡山大学第一内科（現消化器肝臓内科）に入局しましたが、この時点で「プライマリ・ケア」なんて考えること皆無でした。消化器内科医としての未来を考え始めた倉敷中央病院在籍中の卒後4年目、「来月から別病院

に腎臓内科医として異動」という「大人の事情による謎の」医局長命令が下った時が、ジェネラリスト転向のターニングポイントだったように思います。

膠原病専門医も感染症専門医も不在の異動先病院で年の大きく離れた腎臓専門医の上司と2人体制。「よくわからない経過はまず腎臓の先生に」という周囲から無茶ぶりの日々でした。無茶苦茶だったけど充実感も感じたのは、異動前3年間、今でもメンターとして尊敬する（診療科問わず）複数の指導医、先輩同期後輩研修医の皆さんに助けられなんとか研修を全うした、倉敷での「根拠のない妙な自信」故かもしれません。また腎・血液浄化関連コンサルトのfirst callは常時私、という環境で院内ほぼすべての診療科と関係した結果、他科連携多職種連携の重要性も学べたように思います。結局その病院勤務4年間で「総合内科」に魅力を感じ、卒後8年目過ぎようやく「内科学会認定総合内科専門医」を取得しました。

36歳で父の医院（実家）に戻った際も新たな悩みができました。内科系スキルだけでは無理ということがわかり（当然ですね）、今度はプライマリ・ケア医へキャリアチェンジです。幸いこの時も、勤務医時代「たまたま流れで」加入した家庭医療学研究会（その後の家庭医療学会）、プライマリ・ケア学会や故田坂佳千先生のTFCメーリングリストでの学びが生きました。そして香川在住プライマリ・ケア医の皆様との協働での「TFC香川勉強会」発足です。一人では勉強しない飽きっぽい性格を自覚していた故、周りを巻き込めば都合よく私自身の生涯学習につながるのではなか、というある意味不純な動機もありました。継続のため個人的に参加した全ての総合診療系WS・学会等で講師の先生に挨拶し名刺を配り、「ぜひ今度香川にお越しください。おいしい讃岐うどんでおもてなしします！」とお誘いし続けた結果の10年弱のTFC香川勉強会でしたが、その人的ネットワークは今も「全国に散らばる私の指導医」として日々の臨床での疑問点を解決するために生きています。これは活動開始当初には全く想像していなかった私の宝物です。四国4県のみならず全国から香川にお越しいただいた当時の学生含さん含めすべての皆様、ありがとうございます。



これは活動開始当初には全く想像していなかった私の宝物です。四国4県のみならず全国から香川にお越しいただいた当時の学生含さん含めすべての皆様、ありがとうございます。

私の「プライマリ・ケア医的」スキルの全ては結局のところ、研修医時代は全ての皆様に、腎臓内科医時代は無茶ぶりで鍛えていただいた皆様に、開業医以後は地元のみならず全国的ネットワークで友人になれた優秀な皆様に助けていただき得られたものです。「場の強制力」によって自らに生涯学習を課した延長に臨床医としての今の私があることを改めて実感し、これまでお世話になった全ての皆様に感謝いたします。

このような行き当たりばったりの生涯学習は効率が悪くお勧めできません。私がこれまで得たスキルのほぼすべては現卒後臨床研修制度における研修医/専攻医の間におそらく習得できます。今の研修医の皆様、総合診療/家初期家庭医療専攻医の皆様がうらやましいです。もし医学部卒業前に戻れるなら迷わず卒後3年目からのキャリアを総合診療/家庭医療に決め、その意思がぶれないようメンターの力を借りながらの初期研修の2年間は、将来総合診療/家庭医になったらもう経験しないであろう分野を敢えて選択して学ぶ期間にしたいと思います。

今回の受賞は、モチベーション維持へ大きな助けになりました。これからは私の置かれた立場で、還暦を過ぎていきますので諸活動のサポート役の一人として、四国地域でのプライマリ・ケア/総合診療/家庭医療のフィールドでできることを実践し続けたいと思います。皆様、今後ともよろしくお願いいたします。

【新しいプライマリ・ケア認定薬剤師のご紹介】

井手上 真子 先生（四條薬局）

この度、プライマリ・ケア認定薬剤師を取得いたしました、香川県仲多度郡まんのう町にある四條薬局の井手上 真子です。薬剤師になって今年で六年目になりますが、一通りの仕事に慣れてきた三～四年目の頃、これから先も薬剤師として長く働いていく中で何か力を入れて学べる専門分野が欲しいと感じるようになりました。様々な研修や学会大会に参加する中で出会ったのが、プライマリ・ケアの分野でした。

もともと私が薬局薬剤師を志したのは、祖母の薬を自宅まで届けてくださっていた薬剤師さんの姿を見て、患者さんの生活の場の最前線で働きたいと思ったことがきっかけでした。プライマリ・ケアが掲げる「患者さんの生活背景まで視野に入れ、幅広い問題に対応する」という考え方はどの診療科の処方箋でも受け付け、地域住民の生活に最も近い場所で働く薬局薬剤師にこそ必要な視点であり私の目指す薬剤師像にも近いのではないかと感じ、すぐに資格取得に向けた勉強を始めました。研修では、純粋な薬物治療だけでなく、災害医療・メンタルヘルス・地域包括ケア・環境問題など多岐にわたる内容を学びましたが、認定取得までの一年間、楽しみながら取り組むことができました。

今年度からは薬局での調剤・服薬指導に加えて、居宅療養管理指導の業務も担当しています。基本的なやり取りは薬局内と同様ですが、患者さんの自宅での生活の様子を直接拝見できること、そして患者さん自身がリラックスした環境でお話できることで、健康状態だけでなく生活の困りごとやご家族の状況など、一歩踏み込んだ対話ができる点は在宅ならではの実感しています。

今後は、薬局内にとどまらず地域の中で患者さんや住民の方と関わる機会を増やし、「ちょっと相談してみようかな」と思っただけの身近な医療者を目指したいと考えています。薬に関する相談だけでなく、ちょっとした体調の変化や生活習慣のお悩みなど、日常の気掛かりも気軽に話してもらえそうな関係づくりを大切に、必要な医療・介護へと繋げる最初の相談窓口になればと思っています。

患者さんがその人らしく安心して暮らし続けていくためにも、地域医療は欠かせない存在です。その一角を担えるよう、研修や日々の業務で得られた知識を実践に結びつけ、薬の範囲にとどまらない幅広い支援にも丁寧に向き合って参ります。今後も研鑽を積んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

